田辺聖子と川柳

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森西, 真弓 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4680

田辺聖子と川柳

森西真弓

はじめに

田辺聖子には川柳に関する著書が四種ある。単行本の刊行年代順に挙げる。

○『古川柳おちぼひろい』一九七六年九月・講談社
○『川柳でんでん太鼓』一九八五年六月・講談社
○『道頓堀の雨に別れて以来なり―川柳作家・岸本水府とその時代』（上）（下）一九九八年三月・中央公論社
○『田辺聖子の人生あまから川柳』二〇〇八年十二月・集英社新書

田辺はこれらの著作活動を通して、川柳の啓蒙と普及とに大きな役割を果たした。同時に、川柳の文学的、社会的評価を高めることにも寄与した。田辺がどんな風に川柳と出会い、どんな思いで川柳と向き合い、どうやって川柳を世に広めてきたのかについて、紹介する。

（一）川柳との出会い

文学少女だった田辺は幼少時からさまざまな文学作品に馴染んで育った。その中の一つが川柳だった。出会いについて複数の著書の中で触れているので、それを元にまとめてみる。

生家が写真館だったことは知られているところだが、そこで働く叔父たちや青年技師、見習いさんの娯楽用に小説雑誌が数冊定期購読されていて、大人用の雑誌も読んでいた田辺は、そこに掲載されている川柳に目を通していた。子どもたち用の雑誌にも川柳のページがあって、それも当然読んでいた。そこに掲載されていたのは分類すると現代川柳である。

古川柳に出会うのは学生時代。第二次世界大戦中で、生家は昭和

二十年六月の空襲で全焼。その時、多くの蔵書が焼けてしまったが、わずかに焼け残った数冊の中に岩波文庫の『柳多留』一編があった。田辺はそれを掌中の珠と大切にして一ページずつ読み進んだ。戦後は、焼け残った古書店でさらに『柳多留』を買い求め、通勤の満員電車に揺られながら読んだ。

子ども時代から川柳に親しんでいたが、『柳多留』に収載されている古川柳には意味のわからないものも多かったという。古川柳は歴史的知識や人生経験が伴わなければ理解しにくい面がある。そこで、若い頃は、文学的香気を放っていたり、しみじみした人情物の作品から味わっていった。たとえば、次のような句である。

雷をまねて腹掛けやつとさせ
母親はもつたいないがだましよい

年齢や経験を重ねると共感できる作品が増えていく。川柳への傾倒はますます深まった。だが、田辺の川柳に対する理解や愛着と世の中一般のそれとの間には隔たりがあった。川柳はまだ文学として正当に評価されていなかったのである。

（二）古川柳の魅力

川柳は近世江戸時代半ばに生まれた短詩型文学である。俳諧の前句付けの付句が独立したもので、たとえば「きりたくもあり　きりたくもなし」が先に提示されているところへ「ぬす人をとらえてみれば我が子なり」と付ける。このうち柄井川柳（一七一八～九〇）が評点をつけたものを「川柳点」と呼び、そこから起こってジャンルの呼称に「川柳」の名がついた。

川柳は俳句と同じく十七音字で表現されるが、季語や「や」「かな」といった切れ字は用いない。俳句が自然をテーマに花鳥風月を詠むのに対し、川柳は人間や世相をテーマに機知によって人情の機微をうがち、風刺と滑稽を主とする庶民の文芸である。

『柳多留』は、呉陵軒可有ほか編による川柳集で、正式には『誹風柳多留』といい、一七六五年から一八三八年にかけて一六七編が刊行された。近代以降は翻刻もされ、愛好者を増やしていった。

居候三杯目にはそつと出し
役人の子はにぎにぎをよく覚え

といった作品は人口に膾炙している。

古川柳の魅力を多くの人に知ってほしい。作家となった後の田辺にその思いが強くなっていった。創作活動にも古川柳は影響を与えた。『古川柳おちぼひろい』の「あとがき」で冒頭次のように記している。

私は古川柳をよんで創作意欲をそそられることが、しばしばあります。古川柳になじんでいると、人間を見る目のあたたかさを

養なわれる気がします。意気銷沈したときも、憂鬱なときも、古川柳のもつおかしみで慰さめられる気がします。

すでに『文車日記―私の古典散歩』（一九七四年十一月・新潮社）で古典文学の一つとして古川柳を取り上げていたが、まとまった著作となった最初が『古川柳おちぼひろい』である。初出は『小説現代』で、一九七五年から七六年にかけて連載された。ここで田辺は、古川柳を人の世の風情、庶民の一生、赤穂義士、歴史、女ごころ、廓、など、十四のテーマに分類して佳句を上げ、自身の経験や想像を交えながら平易に解説を加えていく。そこでは、小説家としての観察眼や分析力が大いに発揮され、十七音字に込められた人間ドラマが立体的に生き生きと躍動する。

古川柳は、江戸という時代の世態風俗を描きながら、同時に時代を超えた普遍の人情をも映し出して、現代に生きる我々からも哄笑、微苦笑を誘い出すのである。

けれども、田辺が『古川柳おちぼひろい』を著した当時でさえ、川柳に対する無理解は残っていた。後に述べるように、すでに岸本水府（一八九二～一九六五）らによって「本格川柳運動」が起こっていたにもかかわらず、戦後の一時期、艶笑川柳がはやったこともあって、川柳の文学的、社会的評価は低かった。田辺はそれに対して自らの川柳観を「あとがき」で次のように述べた。

川柳が卑俗平明にすぎて、時代精神への批判にまでたかめられていない、ということはよくいわれることですが、果してそうでしょうか。江戸時代の酷烈な言論思想統制のもとで、古川柳の作者たちは、告発の刃を人間の内部へ向けました。古川柳にみる鋭い人間凝視や客観性を、私は興ふかく思います。

それは社会の矛盾をあばき、時代の政治を批判するという外向的発散を超え、人間の内なるものを鋭い歯で噛むのでした。

しかく、人間を看破することかくも犀利に人間を嗤うことかくも無残な、自由闊達な精神の産物がほかにありましょうか。それは一見、おかしみの皮をかぶっているため、卑俗陋劣と見做されやすいのですが、俗の鉾先は間々、雅のそれよりもするどく、人間や人生をあばき、謳い、諷するのです。

川柳を愛し、評価し、応援して実に力のこもった文章であり、卓越した川柳論になっている。この書を通して古川柳に触れ、その魅力を知り、理解を深めた読者も多かった。私事ながら筆者もその一人である。

（三）現代川柳の味わい

『古川柳おちぼひろい』を刊行した九年後、今度は現代川柳を紹介する『川柳でんでん太鼓』を著わす。田辺自身が愛読者として現代川柳の作家、作品を渉猟しているうちに、その面白さ、素晴らしさをもっと多くの人に知ってもらいたいとの思いで書いた。こちら

も『小説現代』に一九八三年から八五年にかけて連載された内容を一書にまとめたものである。古川柳同様、現代川柳もまた、世に正しく受け入れられていないことに対する義憤が書かせたのである。

そのあたりのことを田辺自身が『道頓堀の雨に別れて以来なり』下巻の「あとがき」で触れている。

たぐりよせればよせるほど、好作家や好句佳什が続々出てくる。まるで、咳唾、珠を成す、という感じで無限に零れおちてくる。なんでこんな豊醇な、肥沃な文学風土が世に知られず埋もれているのであろうと私は一驚した。

この本も、二十の項目に分けて書かれている。テーマごとに次々と連想され、取り上げられていく作品とその論評。そこには、田辺のいう「匕首に似た川柳の鋭い人生観照・人間洞察の魅力」がいっぱい詰まっている。

川柳六大家と称される麻生路郎（一八八二～一九三二）、川上三太郎（一八九一～一九六八）、岸本水府、椙本紋太（一八九〇～一九七〇）、前田雀郎（一八九七～一九六〇）、村田周魚～（一八八九～一九六七）をはじめ、数多くの現代川柳作家の作品を紹介した中でも、特に字数を費やしている作者に鶴彬（一九〇九～三八）がいる。二十の項目のうち二つが鶴に割かれているのである。

鶴彬は反戦川柳作家である。本名は喜多一二。一九〇九年、石川県生まれで、一時、大阪に在住したこともある。貧困な生い立ちから社会活動に目覚め、長じて運動家となった。一方で少年時代から読書好きで、文才に恵まれ、詩作などを行っていた。川柳作家であると同時に評論もよくし、すぐれた川柳論を残した。戦前の治安維持法違反で二度逮捕され、収監中の一九三八年九月に二十九歳の若さで亡くなっている。代表作を挙げる。

手と足をもいだ丸太にしてかへし
屍のゐないニュース映画で勇ましい
万歳とあげていつた手を大陸へおいて来た

鶴については、戦後に刊行された坂本幸四郎著『雪と炎のうた田中五呂八と鶴彬』（たいまつ社）や一叩人編『鶴彬全集』（同）などがあり、一部には知られる存在だったが、一般の知名度はまだまだ低かった。田辺も右に挙げた書物で鶴の存在を知った。そして大きな関心を抱くようになり、『川柳でんでん太鼓』で取り上げることになったのである。同書の中で「私自身も鶴彬のことは最近知って昂揚気分でいるところなのである」と記している。

田辺によって鶴彬の名前は広く知られるところとなった。鶴の作品を紹介し、その業績を熱心に顕彰するが、けしてそこに溺れることはない。「昂揚気分」でいながらも、冷静かつ客観的に鶴の存在を評するのである。本文から引く。

暁を抱いて闇にゐる蕾　（鶴　彬）

鶴彬は闇の中の蕾であった。暁という花芯をかたく抱いたまま、暁をみずに散ってしまう。（略）

鶴彬の川柳だけが真の川柳だとは、私は思わない。人生も川柳もさまざまの貌があり、表現もまた、さまざまである。多くの川柳作家が戦争中は、戦意昂揚の標語みたいな句ばかり作っていたのにくらべれば、信条をぬりかえなかった鶴彬はみごとだが、人はそれぞれの運命で超越者に活かされているのであり、おのがじしの能力のうつわから出ることはできない。

ただ、われわれは鶴彬の愛とプライドを忘れてはいけないと思う。大衆に対する彼の愛と、川柳におけるプライドである。

戦争に協力した作家を擁護するのではもちろんないが、時代とともに生きる人間や、そこに現れる世相を詠む川柳の魅力を知り尽くした田辺ならではの論旨だと言える。

なお、鶴彬については『道頓堀の雨に別れて以来なり』でも取り上げ、さらに資料を収集し、関係者に取材して、その生涯を詳しく跡付けた。そして、日常を詠んだ句に批判的だった鶴がもし長命を保っていたら、その味わいに気づく日がきたのではないか、とその才能を惜しみ、早世を悼んでいる。

（四）岸本水府と近代川柳史

『柳多留』で川柳と出会い、やがて現代川柳の世界にも耽溺した田辺が、それまでの川柳研究を集大成してまとめ上げた大作が『道頓堀の雨に別れて以来なり―川柳作家・岸本水府とその時代』である。初出は『中央公論』で、一九九二年から九七年にかけて、途中、阪神・淡路大震災を挟んで六年間の歳月を費やし、六十八回に及ぶ連載が続いた。田辺の著作の中でもっとも浩瀚なものである。

川柳を愛するがゆえに田辺は繰り返し、その評価の低さを嘆き、憂い、魅力を訴え続けてきた。並行して、現代川柳の山脈に分け入るうち、川柳を近代文学の一ジャンルとして確立しようと活動した川柳家たちの存在を知るようになる。その先覚者の一人が岸本水府だった。

岸本水府は本名を龍郎といい、一八九二年、三重県鳥羽市に生まれた。貯金局、新聞社を経て、広告文案家（コピーライター）として福助足袋や寿屋（現サントリー）、江崎グリコなどを担当する。学生時代から雑誌、新聞に当句し、大正二年、川柳雑誌『番傘』創刊時の発行編集者を務め、同五年に結社「番傘川柳」の代表となる。「本格川柳」「川柳の第四運動」のもと、指導者としてマスコミでも活躍した。代表作を挙げる。

大阪はよいところなり橋の雨
千日前肩を叩くと連れになり
人間のまん中へんに帯を締め
ぬぎすててうちが一番よいといふ
年鑑に名が出た人で食べかねる

書名になっている「道頓堀の雨に別れて以来なり」もまた、水府の代表句である。

川柳に限りない愛情を注ぐ田辺は、川柳の作品だけでなく、川柳作家たちの人生や人となりをも深く愛した。川柳の近代化を目指して、川柳革新運動を起こした岸本水府とその仲間たちの情熱を自らのペンで描き出したいと、膨大な資料を収集して読破し、関係者への取材を繰り返した。

岸本水府の評伝を主軸に、盟友たちの活動や作品を紹介したその内容は、結果として近代川柳史となった。原稿用紙二千五百枚に及ぶこの大部の著作に対して、平成十年度の第五十回読売文学賞評論・伝記賞、第二十六回泉鏡花文学賞、第三回井原西鶴賞が贈られている。

「あとがき」で田辺は、「調べ出して痛感したのは、日本文学史の中で〈川柳〉の項が欠如しており、資料も散逸しかかっていることだった。それゆえ〈水府とその時代〉を書くことは、即、日本近代川柳文学史とならざるを得なくなってしまった」と記しているが、井上ひさしは読売文学賞の選評を「近代川柳の全体図示す」と題し、「秀句三千をちりばめた近代川柳史の決定版を得たのである。これはひとつの文学的快挙だ」と高く評価している。また、中西進は共同通信配信の書評で「水府に託して近代日本の生態史を書いた」と記した。日常詠の川柳なればこそ、庶民の生活史としても貴重な記録となったのである。

丸谷才一は、同書の多面性を十二に整理して示した（一九九八年四月十九日・毎日新聞「今週の本棚」）。非常に明快なので、次に紹介する。

○岸本水府の伝記
○水府川柳名作選とその鑑賞
○水府周辺の川柳作者の短い伝記の集成
○彼らの川柳の名作選
○『番傘』の歴史
○近代川柳史
○その前史
○水府の（中略）コピーの名作選
○戦前コピー・ライター史
○戦前コピー名作選
○大阪人中心の日本近代史
○近代日本世相史

田辺自身は生前の水府には一度も会っていないのだが、子どもの頃から父がその名前を唱えるのを耳にし、ＯＳＫ（大阪松竹歌劇団）のファンでもあったので、そのテーマソングというべき「桜咲く国」の作詞者としても馴染んでいた。

そして、作家としての円熟期に川柳家・岸本水府の業績に触れ、その足跡を丹念に調べて論述し、活動を顕彰することで、自らの長年にわたる川柳研究をそこに結実させたのである。

むすび

川柳はかつて男の文芸だった。ことに古川柳の江戸時代は、男の視線で詠まれた句が圧倒的に多かった。そこで、と田辺はいう。「女性が馴染むことによって、思考のバランスがとれるような気がします」と。また『誹風末摘花』のように色事を扱ったバレ句は女の自分では歯が立たないとも述べている。

だが、『道頓堀の雨に別れて以来なり』の文庫版の「あとがき」で触れているとおり、近年、現代川柳の世界では女流の台頭が目立ってきている。同書の上巻を収録する『田辺聖子全集』19（二〇〇六年・集英社）の月報には、田辺と活躍中の四人の女流川柳家による座談会も掲載されている。

また、サラーリーマン川柳に代表されるさまざまな公募川柳の実施、さらには新聞、雑誌、テレビ、ラジオなど多くのメディアで川柳が取り上げられるようになり、最近ではブームと呼んでいいほどに川柳が盛んになった。量が質を落としかねないという危惧は一部であるものの、川柳への理解が深まり、愛好者が格段に増えた。長年に及ぶ田辺の川柳に関する著作活動が、現今の隆盛を導き出した要因の一つであることは疑いようがない。二〇〇八年十二月には、より平易に川柳の滋味を説いた『田辺聖子の人生あまから川柳』を著している。

田辺自身は川柳の実作を行わないが、自らの文学との関わりについて『道頓堀の雨に別れて以来なり』の「あとがき」で次のように記した。

私が川柳愛好者（ファン）であるのは、私の書きたい小説風土が川柳の持ち味に通底しているからであろう。私は市井の人情（親愛もエゴも据傲も偏見も猥雑も含めて）とユーモア（辛口にしろ甘口にしろ）が好きだ。常識的に見えながら、突如取りはずす間（ま）のおかしみ、平均的発想とのズレを好む。川柳にはそこを衝（つ）いた着想も多いからだろう。

川柳と出会ったことで田辺自身の人生や文学がより実りある豊かなものになった。川柳もまた田辺のペンを通して、その豊穣な魅力を多くの人に知ってもらうことが出来た。双方にとってまことに幸いな邂逅であった。

＊本稿を執筆するに際し『田辺聖子全集』（集英社）収載の「解説」「解題」「月報」を参考にさせていただきました。